

日本文化の相対主義的性格とその現代的な意味

石井 登

帝京短期大学

【抄録】

本稿は、日本文化の「相対主義的な性格」の形成諸要因を検討し、この性格がどのような現代的意味をもつかを考察する。世界史上でも特異な縄文文化とその日本文化に与えた影響、牧畜を基礎としない穀物・魚貝型とも言うべき日本文化が生み出した独自の生命観、異文化による侵略・征服を経験せず、大陸文明を自分に合わせて選択的に吸収したことなどが、日本の相対主義的な文化形成の要因になっている。

日本文化は、世界の特定の「普遍的な文明」のみにこだわらず、相対主義的な姿勢で自由に多くの文明から吸収しつづけたからこそ、独自の文化を形成し、それが逆に世界の新たな文化モデルになる可能性を秘めるようになった。原理原則にこだわらず、それぞれの文明の長所を自由に受け入れて、自ら合わせて作り替えた相対主義的な在り方が、現代においてこそ積極的に評価されるべきである。

【キーワード】 日本文化, 相対主義, 新たな文化モデル

I. 「相対主義」とは何を意味するか

本論のテーマは、日本文化の「相対主義的な性格」がどうして形成されたのか、その諸要因を考察し、さらにこの性格が現代世界にあってどのような意味をもつのかを考察することである。

まず、日本文化の「相対主義的な性格」とは何を意味するのか。手短かに言えば、日本の文化や社会を統合する中心的な理念の働きの、西欧や中国の文明に比べて強くなかったということである。宗教的は、一神教に対し多神教的な性格の強い文化を形成してきたということである。つまり、日本の文化は、宗教、イデオロギーなど社会を統合する理念という観点から見るとこれといった明確で強力な軸がなく、かなり相対主義的な特徴をもっているといえよう。

欧米諸国ならキリスト教、西アジア諸国ならイスラム教というように、その社会や文化の中心となる理念軸が明確だ。韓国や中国も、歴史的には儒教が中心軸になって形成されたことは否定できない。キリスト教、イスラム教、儒教などを基礎にして形成されたいわゆる「普遍的な文明」はみな、この強固な軸もち、それがひとつの「世界標準」をなした。

それに対して日本の場合はどうか。儒教が中心軸だと主張すれば、では仏教は？神道は？という疑問が生じる。かといって、「仏教」、「神道」、「武士道」などのどれか他の一つに絞るのも無理であろう。あえて言うなら、それらすべてが溶け合ったものというほ

かない。いずれにせよ、日本の場合は社会や文化の明確な中心軸、絶対的な理念が見えない、その意味で「相対主義的な性格」の強い文化である。このような相対主義は、日本文化の個々の側面にも広く及んでいるように思われる。

II. 日本文化を考えるための8視点

筆者は、日本文化の特徴の以下のような8項目の視点から総合的に把握することを志している。

(1) 漁撈・狩猟・採集を基本とした縄文文化の記憶が、現代に至るまで消滅せず日本人の心や文化の基層として生き続けている。

(2) ユーラシア大陸の父性的な性格の強い文化に対し、縄文時代から現代にいたるまで一貫して母性原理に根ざした社会と文化を存続させてきた。

(3) ユーラシア大陸の穀物・牧畜文化にたいして、日本は穀物・魚貝型とも言うべき文化を形成し、それが大陸とは違う生命観を生み出した。

(4) 大陸から海で適度に隔てられた日本は、異民族により侵略、征服されたなどの体験をほとんどもたず、そのため縄文・弥生時代以来、一貫した言語や文化の継続があった。

(5) 大陸から適度な距離で隔てられた島国であり、外国に侵略された経験のない日本は、大陸の進んだ文明の負の面に直面せず、その良い面をひたすら尊崇し、吸収・消化することで、独自の文明を発達させる

ことができた。

(6) 海に囲まれ、また森林の多い豊かな自然の恩恵を受けながら、一方で、地震・津波・台風などの自然災害は何度も繰り返され、それが日本人独特の自然観・人間観を作った。

(7) 以上のいくつかの理由から、宗教などのイデオロギーによる社会と文化の一元的な支配がほとんどなく、また文化を統合する絶対的な理念への執着がうすかった。

(8) 西欧の近代文明を大幅に受け入れて、非西欧社会で例外的に早く近代国家として発展しながら、西欧文明の根底にあるキリスト教は、ほとんど流入しなかった。

本論のテーマは、このうち7番目の項目に関係する。ただしこれらの8項目は相互に深く関連しており、7番目以外の項目のすべても、何らかの意味で日本文化の相対主義的な性格が形成された理由になっている。よって、これらの項目に沿って順に論を進めていきたい。

(ただし、(6)についての考察は、紙面の関係で今回は割愛する。)

Ⅲ. 縄文文化の母性原理

まず(1)と(2)の項目から考えよう。この二つの項目はいずれも縄文時代に関係する。縄文時代は世界史的に見て極めて特異な時代である

旧石器文化を人類史の第一段階とするなら、農業の開始とともに始まる新石器文化はその第2段階をなす。縄文文化は、土器制作と定住という、明らかに旧石器文化にはない特徴をもっている。それでいながら新石器文化の本質をなすはずの本格的な農業を伴わない。

農業を新石器文化の前提としてしまうと、縄文文化をうまく位置付けることができないのだ。縄文文化は、「新石器文化に併行あるいは相当する日本列島の独自の文化」¹⁾というような苦し紛れの定義でもしないと世界史上に位置付けられない特異さをもっているのだ。

筆者は、本格的な農業を伴わない新石器文化という縄文文化の特徴は、日本文化全体を語るうえでどれほど強調してもし過ぎることはないほど重要な意味をもっていると考える。日本列島に住む人々が、1万数千年にわたってこのような縄文文化を生きたとということが、その後に展開した日本文化の全体に深く影響していったのではないか。

日本列島で歴史の第1段階から第2段階へという縄文革命が起こった引き金は、土器の制作と使用だった

という。縄文土器は、大陸で発見された土器と用途の面で大きな違いがある。大陸での土器は、四大文明に共通して、農耕によって得られた食物の貯蔵と盛りつけ、あるいは捧げもの用であった。これに対して縄文土器は、もっぱら食物の煮炊き用として使用され始める。縄文文化が同時代の世界において特異であった理由のひとつが土器の用途の違いにあったのである。

新石器文化が農耕・牧畜の開始によって始まったことは、特定の食物を選択したうえで効率的に増産することだった。しかし同じ作物を集中的に栽培すれば増産は可能だが、天候不順などによるリスクは高くなる。これに対して縄文時代の人々は、自然界の多様なものを食べることによって食糧事情の安定化を図った。煮炊き用の土器が、自然界で食べられるものの範囲を大幅に広げた。本格的な農耕を伴わなかったにもかかわらず、煮炊き用の土器で食糧事情が安定し、その結果、定住が可能となったともいえる。

縄文時代の土器の制作と保有量は、「本格的な農耕をともしない社会としては、世界のいかなる地域にくらべてもきわだって多い」²⁾という。縄文人が、土器を日常的に煮炊きに使っていた結果である。縄文社会が、農業を基盤とした大陸の社会に劣らない文化的な充実度をもっていた大きな要因に、煮炊き用の土器の普及があったと言えよう。

さて世界における農耕の開始は、大地を母とし、農耕を生殖活動と同じとみなす原始宗教の世界観を生み出す。世界に広く出土する土偶も、豊饒な母なる大地をあらわす地母神である。それは多産、肥沃、豊穡をもたらす生命の根源でもある。地母神への信仰は、アニミズム的、多神教的世界観と一体をなす。

一般的に言って、豊かな森の恵みや大地の豊饒性に根ざす世界では女神が信仰されるといえよう。メソポタミアの各地でも、エジプトでも、さらにギリシアでも、豊穡なる大地の象徴である地母神が信仰された。

しかし、紀元前1200年頃の大きな気候変動があり、北緯35度以南のイスラエルやその周辺は乾燥化した。その結果、35度以北のアナトリア(トルコ半島)やギリシアでは多神教が残ったが、イスラエルなどでは大地の豊饒性に陰りが現れ、多神教に変わって一神教が誕生する契機となったという。

これは、信仰の中心が大地から天へと移動し、宗教の性格も母性的なものから父性的なものへと転換したことを意味する。父性的な宗教の典型がヤーウェを唯一神として信仰するユダヤ教である。やがてユダヤ教からキリスト教が生まれてヨーロッパ世界に広がり、さらに遅れて、先行する二つの一神教に刺激されながら西アジアでイスラム教というもう一つの一神教が成立する³⁾。

ところで日本列島は、世界的な気候変動にもかかわらず大地の豊饒性にそれほど変化しなかった。降水量に恵まれた風土は、森林の成育にとって好条件となり、温帯地域としてはめずらしい程の豊かな森に恵まれた環境が維持された。この好条件と煮炊き用の土器の使用とにより、一部農耕を取り入れながらも、狩猟・漁撈・採集を中心にした縄文文化を高度に発達させ、しかも長く存続させることができたのである。

たとえばその特異な土偶からも推察できるように、森の恩恵をたっぴりと受けて生きた縄文人の宗教的な世界も、豊穡な自然に根差した母性的な性格を失わなかった。いや、ある意味で縄文人の宗教世界は、農耕民以上に母性的な性格をもっていたのではないか。農耕には、自然に働きかけて変えようとする強力な意志が含まれるが、本格的な農耕を必要としなかった縄文人は、与えられたままの自然に依存する傾向がより強いからである。

こうして、旧大陸のほとんどの地域が農耕社会にはいり、イスラエルとその周辺地域から父性原理的な一神教が広がっていくなか、日本列島に住む人々は1万年以上の長きに渡って、豊饒な大地と森の恵み、豊かな海の幸に依存する高度な自然採集社会を営んだ。その宗教生活は、「母なる自然」を尊崇する、きわめて母性的な色彩の濃いものであった。一神教が父性原理的で絶対主義的な性格をもつのに対し、日本列島で育まれた多神教は、母性原理的で「相対主義的な性格」を長く保ち続けるのである。

善悪を明確に区別し相対主義を許さない父性原理に対し、自然崇拜的な「森の思考」は、多様なものの共存を受け入れる母性原理を特徴とする。一神教を中心とした父性的な文化は、対立する極のどちらかを中心として堅い統合を目指し、他の極に属するものを排除しようとする。母性原理は逆に相反する極をともに受容する。

縄文時代は、新石器文化の定住段階に入っても本格的な農耕をもたず、自然との深い共生の関係を1万数千年もの長期にわたって保ち続け、しかも表現力豊かな土器を伴う充実した社会を築いていた。それは、大和朝廷成立以降の日本の歴史時代に比べ10倍近くも長い、世界史上でもユニークな時代である。だからこそ縄文時代の、母性原理的な文化と自然観は、その後の日本人にとっては消し難い「文化の祖形」となったといえよう。

IV. 相対主義的な生命観

次に日本文化の特徴の(3)、「ユーラシア大陸の穀物・牧畜文化にたいして、日本は穀物・魚貝型と

も言うべき文化を形成し、それが大陸とは違う生命観を生み出した」の考察に移りたい。その生命観とは、「相対主義的な性格」の強い生命観である。

日本の穀物・魚介文化は、より限定的に稲作・魚介文化と言ってもよいが、ともあれ牧畜を伴わなかったことの意味はきわめて大きく、日本文化のユニークさを形づくるきわめて大切な要素だ。四大文明はムギ作を基盤とした文明であった。ムギはコメに比べ生産性が低いので多くは牧畜を伴う。

日本は温暖湿潤で、険しい山地と狭い平野によって構成されているので、水田稲作には向いているが牧畜には不向きだ。日本の歴史には牧畜が存在せず、厳密には有畜農業の経験も乏しい。牧畜が存在しなかったということは、それによる森林破壊を免れたということであり、縄文時代に培われた「森の思考」、母性原理的な宗教が生き残ったということである。

稲作は、面積当たりの収穫量が高いが、一方で労働投入量も非常に高く、しかも家族の単位を超えた共同作業を必要とする。村落共同体による共同作業は相互の信頼と勤勉さが不可欠で、それが勤勉で集団志向という日本人の基本的な性格を作ったのは確かだろう。

日本に家畜を去勢する習慣がなく、したがって人の去勢たる宦官がいなかったのも、牧畜・遊牧文化の影響がほとんどなかったためである。ユーラシア大陸のどの地域にも宦官は存在した。また日本には、人の家畜化である本格的な奴隷制度も根付かなかった。本格的な奴隷制度が根付かなかったのは、世界的にはむしろ例外に属するようだ。

欧米人にとって人間は、被造物全体の中で特別に神の「息吹」を与えたものとして、他の動物とは本質的に違う。神の似姿である人間は、他の動物より決定的に価値が高い。それは、人間の「理性」に根本的な価値を認め、そこに価値判断の基準を置くからだという。

旧約聖書を生んだヘブライ人は、もちろん牧畜・遊牧の民であった。ヨーロッパでもまた牧畜は、生きるために欠かせなかった。農耕と牧畜で生活を営む人々にとって家畜を飼育し、群れとして管理し、繁殖させ、食べるために解体するという一連の作業は、あまりに身近な日常的なものであった。それは家畜を、心を尽くして世話すると同時に、最後には自らの手で殺すという、正反対ともいえる二つのことを繰り返して行うことだった。愛護と虐殺の同居といってもよい。その互いに相反する営みを自らに納得させる方法は、人間をあらゆる生き物の上位におき、人間と他の生物との違いを極端に強調することだった。それは、極端に人間中心的な生命観であった。

「肉食」という食生活そのものよりも、農耕とともに

に牧畜が不可欠で、つねに家畜の群れを管理し殺すことで食糧を得たという生活の基盤そのものが、牧畜を知らない日本人の生活基盤とのいちばん大きな違いをなしていたのではないか。それが生命観の違いをも生んだのではないか。つまり多量の家畜をつねに育て、管理し、その交尾を日常的に目撃し、育てた家畜を解体して食べる、それが生活の重要な一部であればこそ、人間と家畜との徹底的な違いを強調せざるを得なかったのである⁴⁾。

ところが遊牧・牧畜を本格的に営まなかった日本文化は、人間と家畜を根本的に区別する必要を感じなかった。日本人は、「生命」そのものに価値を認めるので、人間と動物は同じ「生命」として意識され、場合によっては無生物にさえ「生命」を感じ取る。つまり、人間と動物、植物さらに無生物の間の区別は相対化されるのである。その生命観の違い、つまり人間と他の生物を厳しく区別する人間中心的な生命観と、その区別を相対化し、人間も他生物も同じ命と見なす生命観との違いが、遊牧・牧畜の有無と深く関係していたのである。

牧畜を行わず、稲作・魚介型の文明を育んできた日本を、ユーラシアの文明に対し、次のような特徴をもつものとしてまとめることができよう。

①牧畜による森林破壊を免れ、森に根ざす母性原理の文化、相対主義的な文化という特徴が存続した。

②宦官の制度や奴隷制度が成立しなかった。

③遊牧や牧畜と密接にかかわる宗教であるキリスト教がほとんど浸透せず、相対主義的な性格をもつ多神教が生き残った。

④遊牧や牧畜を背景にした、人間と他生物の峻別を原理とした人間中心的な生命観とは違う、動物も人間も同じ命と見る相対主義的な生命観を育み、日本人の相対主義的な世界観の一部をなしている。

V. 異民族による侵略がなかった文化

次に、日本文化の特徴8項目のうち(4)「異民族により侵略、征服された体験をほとんどもたず、そのため縄文・弥生時代以来、一貫した言語や文化の継続があった」という観点から論じたい。

日本と大陸を隔てる海は、古代の技術でも渡航困難なほどには広くないが、しかし大規模な移民や軍事攻撃を組織的に行うには広すぎた。もし渡航したとしても、軍団はバラバラに到着し、統一行動がとれない可能性が高かったであろう。大陸から適度に隔てられた日本は、高度な文化や知識は流入し得ても、短期での大量移民や大規模な軍事攻略は困難だったのである。

先進文明との適度な距離と列島としてのまとまりと

いう稀有な条件が、日本の歴史に決定的に影響した。大陸から「狭くない海」で隔てられていたことは、日本を異民族との戦争のない平穏な社会にした。

それは弥生人の渡来時にすでに始まっていた。大量の移民が一度に押し寄せることが困難だったからこそ、縄文人が弥生人に圧殺され駆逐されることなく、両者の文化が融合した。弥生人の渡来が、異民族による侵略・制服という恐怖の体験ではなかったことが、その後、日本が外来文化を受け入れていく上での「原体験」になって、のちのちまで影響を与えたのではないか。異質な文化や物を、自分の社会に抵抗なく取り入れて自分のものにしてしまう相対主義的な融合文化の祖型は、この「原体験」にあったのであろう。

一方、人類が大陸の大河の流域などで農業を始めた頃、その周囲には多くの遊牧民が勢力をもっていた。農耕民は、遊牧民から生命と財産を守るため、強いリーダーの下に結集し、攻撃を防ぐ施設を備えなければならなかった。つまり、城壁で囲まれた都市国家が生まれていったのである。中世以前の都市は、アテネ、ローマ、ロンドン、パリ、フランクフルト、バグダッド、ニューデリー、北京、南京など、すべて堅固な城壁で囲まれていた。

これに対し日本では、城壁で囲まれた都市がなく、城下町はあっても城内町は存在しなかった。日本列島は、険しい山と狭い平野は遊牧に適さなかったし、海を越えて遊牧民が侵略してくることも、蒙古襲来以外にはなかった。異民族に侵略され、征服され、虐殺されるというような悲惨な歴史がなかった。明治維新に至るまでは、異民族との闘争とはほぼ無縁であり、だからこそ日本人は、「城壁のない都市」をつくった唯一の民族なのだ。

もちろん日本人同士の紛争は多く経験しているが、同じ民族同士の戦争なら価値観を根底から変える必要はない。しかし相手が異民族であれば、自民族こそが正義であり、優秀であり、あるいは神に支持されているなどを立証しなければならない。

他民族との戦争を通して、部族の神は、自民族だけではなく世界を支配する「正義の神」となる。そして「正義の神」相互の殺し合い、押し付け合いが行なわれる。社会は、異民族との戦争によってこそイデオロギー的になる。「普遍的な価値観」、「絶対的な価値観」によって戦いを合理化しなければならないからだ。

日本は、異民族との激しい闘争をほとんど経験してこなかったために、西洋的な意味での神も、イデオロギーも必要としなかった。強力な宗教やイデオロギーによる社会の再構築なしに、自然発生的な村とか農村共同体に安住することができた。絶対的な理念による

社会の統合を形成せず、相対主義的な文化と社会に甘んずることができたのである⁵⁾。

だからこそ、縄文時代以来の「森の思考」、母性原理的な宗教や文化が、本格的な農耕の始まった弥生時代にも引き継がれ、さらに高度産業社会の現代にまで生き残ったのである。日本文化の特異さとは、縄文的な要素を多分に残した農耕文化、しかも牧畜を知らず、遊牧民との接触もなかった農耕文化の特異さということであろう。そして、農耕文化が、縄文的な心性を残しながら連綿と続くことができた条件の一つが、大陸の異民族による侵略・征服などがなかったということなのである。

VI. 「いいとこどり」の文化

日本文化の特徴の(5)、「大陸の進んだ文明の負の面に直面せず、その良い面をひたすら吸収・消化することで、独自の文明を発達させることができた」も、前項の考察と密接に関連する。さらにここでは(8)の「西欧の近代文明を大幅に受け入れて、近代国家として発展しながら、西欧文明の根底にあるキリスト教は、ほとんど流入しなかった」という特徴も併せて論じたい。

日本は「辺境」の島国であったためか、これまで「世界標準」や「普遍的な文明」を生み出すことはなかった。大陸で生まれた「世界標準」をひたすら吸収してきた。異民族に侵略・征服された経験をもたない日本は、海の向こうから来るものには一種の憧れをもって接した。そして外来の優れた文物だけを「いいとこどり」⁶⁾して、利用することができた。そこに、絶対的な「正義の神」を持たない相対主義の強みがある。そうやって形成された日本の文化は、「受容性」を特徴としていた。それは、もっぱら「師」から学ぶ姿勢で大陸の文明を吸収し続けることである。

そうやって中国文明を吸収し、それを自分たちの伝統に添う形で洗練させ、高度に発展させてきた。また西欧諸国による侵略を免れた日本は、かつて中国文明に接したときと似たような態度で、西欧文明に憧れ、その優れたところだけ(自分たちに消化できるものだけ)を取捨選択して吸収することができたのである。

しかし、無条件に何もかも受け入れたわけでもない。たとえば、中国から律令制度を取り入れながら、その重要な一部である、宦官や科挙の制度を受け入れていない。儒教は積極的に学びながら、儒教の根本原則の一つである同姓不婚という制度は日本に入ってきた。これは、同じファミリーネームをもつ男女は結婚できず、また異なる姓の男女が結婚すると、互いにもとの家の姓を名乗るという制度だ⁷⁾。

明治維新以来の日本社会は、他のいかなる非西欧諸国よりも貪欲に西欧文明を吸収し、いち早く近代化することに成功したが、キリスト教徒は圧倒的に少ない。現代日本のキリスト教徒は百万人程度で、人口の1%にも満たず、この数字は明治以来ほとんど変わらない。明治以前は言わずもがなである。

日本は「一神教が浸透しなかった最大の国」なのである。科学技術や政治・経済システムの面では近代文明を大幅に取り入れ成功を遂げながら、その文化の深層の部分では一神教を頑なに拒んでいる。おそらくそれは、農業文明以前の縄文的な心性が、現代の日本人にまで脈々と受け継がれていることから来る。母性的で相対主義的な日本文化にとって父性的な一神教の絶対主義は、きわめて馴染みにくいのである。

「普遍的な文明」の絶対的な理念や中心軸、宗教をそのまま自文化の中に持ち込めば、自分たちの根底にある文化の相対主義が脅かされるから、無意識のうちに拒む。しかし、その相対主義を脅かさないかぎりでは、他文明の個々の成果をためらいもなく受け入れ、それをいつの間にか自分に合うものに造り変えてしまう。そこに日本文化のユニークさと不思議さがある。

VII. 「相対主義」の現代的意味

さて、ここまで論じて我々は、日本文化の相対主義的な性格がどのような現代的な意味を持つかという最後のテーマに足を踏み入れたようだ。

日本文化の特異さのひとつは、「普遍的な文明」の「世界標準」によって完全に浸食されてしまわずに、農耕文明以前の母性原理的で、縄文的な文化が現代にまでかなり濃厚に受け継がれたことだ。これは世界史上でも稀有なことである。儒教や仏教を受容したときも、自分たちが元来持っていた自然崇拜的な宗教にうまく合うように変形した(神仏習合など)。

「世界標準」とは、まずはキリスト教、イスラム教、仏教、儒教など、それ以降の文明の基礎を築くことになった普遍宗教であろう。そして、それらの普遍宗教に基づいて生まれた文明の原理であろう。たとえばヨーロッパ文明は、キリスト教をひとつの基礎としながら、また一面ではそれと対抗しながら、近代の各種原理を生み出していった。「自由」「民主主義」「人権」「合理主義」「科学」「進歩」「自由主義経済」などがそれにあたる。そして、それらが現代のもっとも強力な「世界標準」になっていったのである。

「世界標準」の普遍宗教は、激しい闘争の中で民族宗教の違いを克服することによって生まれたとも言える。それもあって、それぞれの普遍宗教を背景にも

つ「世界標準」自体は、お互いに相容れない傾向がある。自分こそ「世界標準」だと言い張って互いに争うのである。現在までのところ、その勝者が近代ヨーロッパだったわけだ。

ところが日本人は、そうした「世界標準」の原理原則にこだわらずに、自分たちに合わせて自由にいくつもの「世界標準」を学び吸収してきた。自文化のアイデンティティを根底から脅かすものはほとんど無意識に拒否するという強固な傾向により、一神教だけではなく、奴隸制も宦官も科擧も日本には入ってこなかった。しかし、一度取り入れたものは、その背景にある原理原則にこだわらず自由に組み合わせ、そこから独自のものを生み出すことができた。神道を残したまま儒教も仏教も西欧文明も自己流に消化し、併存させたのである。その受容性、あるいは相対主義こそが日本文化に豊かさと発想の自由さを与えた。

そして現代の日本は、長い受容の歴史の結果、その豊かな蓄積の内側から次々と独自の文化を生み出すようになった。浮世絵に代表される江戸時代の豊かな庶民文化も、幕末から明治初期にかけてフランスなどヨーロッパに知られ、その流行はジャポニズムと呼ばれた。

それぞれの文化の背景にある宗教やイデオロギーに縛られずに、さまざまな要素を融合させてしまう柔軟さは、現代のポップカルチャーにもいかに発揮されている。それが、インターネットなどの情報革命によって江戸時代とは比較にならないほど広範に世界に影響を与え始めた。

現代のジャポニズム（マンガ・アニメに代表されるポップカルチャーなど）は、中国文明だけではなく西欧文明やアメリカ文明の受容と蓄積が加わり、それが縄文時代以来の日本の伝統の中で練り直され、磨かれることによって豊かに開花したものといえよう。例を挙げればきりが無いが、たとえば宮崎駿のアニメ作品のなかにどれだけ神道的な要素や古代中国的な要素や西欧的な要素が融合しているかを見ればよい。

今、世界は「普遍宗教」同士の深刻な対立を背景にした紛争やテロが後を絶たない。環境問題や経済の混乱の深刻化などにより、西欧近代の文明原理がかなり問題をはらむのではないかと疑われ始めました。では日本は、それに替わる新たな「世界標準」を生み出すことが可能なのだろうか。これに対する筆者の答えは、上に述べたような「世界標準」という意味でなら「否」というものである。しかし、「世界標準」という言葉にこだわらずもっと柔軟な見方をすれば、必ずしも否と言えない。

逆説的なことだが、ひとつの「世界標準」にこだわらず、つまり絶対視せず、相対主義的な姿勢で自由に

学び吸収しつづけたからこそ、そこから生まれた独自の文化が、今後の世界にとって新たなモデルになる可能性を秘めるようになったのではないか。

近年の日本人は、「世界標準」同士が張り合ったり、宗教同士が争い合ったりすることが、どれだけ悲惨な結果を生んできたか、そして今も生みつつあるかを、かなりよく知ることになった。そして自分たちのようにあまり原理原則にこだわらず、それぞれのいいところを自由に受け入れて、自分たちに合わせて作り替えていく行き方が、逆に豊かな結果をもたらすことをようやく知ることになった。そして、そういう日本のあり方や日本が発信する文化を、世界がクールと感じ始めたのではないか。

【文献】

- 1) 小林達雄（2008） 縄文の思考 筑摩書房 p.29
- 2) 同上 p.50
- 3) 安田喜憲（1994） 蛇と十字架 人文書院 p.100参照
- 4) 鯖田豊之（1966） 肉食の思想—ヨーロッパ精神の再発見 中央公論社 pp.56-60参照
- 5) グレゴリー・クラーク 竹村健一（1979） ユニークな日本人 講談社 pp.128-129 参照
- 6) 堺屋太一（1991） 日本とは何か 講談社 p.154
- 7) 小松左京（1997） 日本文化の選択原理 講談社インターナショナル pp.158-167参照

Relativism in Japanese culture and its meaning in the modern world

Noboru ISHII

Teikyo Junior College

【Abstract】

The purpose of this study is to examine several formative factors of relativism in Japanese culture and to find out the meanings of such a character in the modern world.

The first formative factor is the unique Jomon culture in the world history and its influence on ensuing Japanese culture. The second formative factor is the distinctive view of life built Japan's its long history which is called "the grain-seafood model" without cattle breeding. And the third formative factor is Japan's selective adoption of various elements in advanced civilizations in the world without adopting the principles behind each civilization.

This relativism in Japanese culture, which doesn't insist on any fundamental principles, has brought rich cultural results, and therefore, should be evaluated positively, especially in modern society.

【Key words】 Japanese culture, relativism, a new cultural model